

月刊

インド



Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会 (日印間の政治・経済・文化・人的交流に貢献して 120 年)



9月9日 G20 ニューデリー・サミットでの日印首脳会談

(写真提供：内閣広報室)

目次

アジア最大の国際文学祭『ウンメーシャ 2023』見聞録	P. 3
日印交流の舞台横浜 ～都市の発展と世界への貢献～	P. 6
インドニュース(2023年7月-8月)	P. 9
新刊書紹介	P. 11
新規法人会員のご紹介	P. 13
イベント紹介	P. 13
掲示板	P. 14

広告削除後、目次とページを合わせるために空白ページをいれております。

アジア最大の国際文学祭『ウンメーシャ 2023』 見聞録

Insights on UNMESHASHA 2023, Asia's Largest International Literature Festival

作家／博士（人文科学）／インド工科大学ハイデラバード校教養学部客員准教授
公益財団法人日印協会理事 山田真美

去る8月3日から6日までの4日間、インド中部に位置するマディヤ・プラデーシュ州の州都ボーパールに於いて、『ウンメーシャ 2023～表現の祭典』と銘打たれた国際文学祭が開催されました。

ウンメーシャは「開くこと」「表現」「閃き」「出現」などの意味を持つサンスクリット語で、今回の場合は「大きく発展すること」の意味が含まれていたようです。

文学祭を主催したサーヒティヤ・アカデミー（以下、アカデミー）はインド政府・文化省のもとで活動する自治組織で、英名を India's National Academy of Letters（インド国立文学アカデミー）と言います。設立はインド独立から七年後の1954年。現役的首相であったジャワハルラー・ネルーが初代会長を務めていることから、アカデミー発足に向けた当時のインド政府の意気込みが伝わってきますね。ちなみにサーヒティヤは、文学または文学作品を意味するサンスクリット語です。

今回、筆者はアカデミーからの招待を受けてウンメーシャ 2023 に出席し、世界各国から参加した6人の作家・詩人・翻訳家の皆さんとご一緒のトークセッションで『グローバル化する世界のためのグローバル文学』のテーマで意見を述べてまいりました（使用言語は英語）。

本稿では、筆者が体験したウンメーシャ 2023の様子と、そこから垣間見えたインドの言語事情を、駆け足でご報告したいと思います。

この時期、インドでは英国からの独立75周年を祝う一連の祭典が政府主導のもとで行なわれていました。人口がついに中国を抜いて世界一になり、極めてメッセージ性の強い映画『RRR』が空前の大ヒット。月面着陸にも成功し、さらに来る9月9日～10日にはG20首脳会議の議長国として世界のリーダーシップを取る予定のインド。そんな、今や飛ぶ鳥を落とす勢いのこの国での文学祭開催です。

参加者は14か国から集まった575人の作家や詩人たち。14か国の内訳は、インド、日本、アイルランド、アメリカ合衆国、英国、スペイン、スリランカ、チベット、ナイジェリア、ネパール、フィジー、ポーランド、モリシャス、モルディブ（以上、主催者発表）。

このうち日本からの参加者は、インド哲学研究者で『バガヴァッド・ギーター』（角川ソフィア文庫 2022）の名訳で知られる佐藤裕之先生と、筆者の二名だけでした。

参加言語数は、なんと102言語。これだけの言語が一堂に会したら一体どんなことになるのか、興味津々で出かけてまいりました。

開催地のボーパールへは、首都デリーから飛行機でほぼ真南へ約1時間20分。空港で係官に丁寧に迎えられ、専用車で連れて行かれた先は、最上階にプールとジムとスパとクラブを備えた五つ星のTaj Lakefront, Bhopal。最高級のおもてなしで迎えてくださったアカデミーに感謝するとともに、この文学祭がインドにとって非常に大切な意味を持つものであることを改めて実感しました。



ウンメーシャ 2023 開会式でスピーチをするムドウム大統領閣下
©Sahitya Akademi

余談ながら、今回ボーパールがウンメーシャ 2023の開催地に選ばれたのは、十一世紀に当地を治めたボージャ王が芸術・文学・科学など学問全般（特にサンスクリット語）の強力な庇護者であり、ご本人も素晴らしい詩人だったことに由来するそうです。

文学祭の初日に行なわれた開会式には、大統領がご臨席になりました。インドは連邦共和国で、行政権は実質的に首相の掌中にありますが、国家元首は大統領です。ただし大統領の任務は儀礼的なものが多く、例えて言え

ば、日本の天皇陛下がさまざまな行事や式典にお出ましになるのと似ているかもしれません。

現在のインド大統領はドラウパディ・ムルム閣下とおっしゃって、女性としてはインドで二人目、先住民族としてはインド初の大統領であることも、ひと言、付け加えておきましょう。

開会式が終わり、大統領がお帰りになると、会場にはさまざまな言葉が堰を切ったように飛び交い始めました。何しろ 102 種類の言葉を話す人たちが集まったのです。会場全体がそれこそ言葉の洪水の中に巻き込まれてしまったようなカオス感で、その状況が延々と朝から晩まで 4 日間続きました。

筆者が参加したセッションは、文学祭初日の、大統領のスピーチのすぐあとだったため、聴衆は皆、「待っていました！」とばかりに目を輝かせ、一言も聞き漏らすまいと精神を集中させて、大きく身を乗り出して聞いてくれました。大学生と思われる若い人の参加が目立ちました。

トークセッションで話した内容をすべてここに書くことは不可能ですし、その必要もないと思いますが、「グローバル化と文学」に関する筆者の発言の趣旨だけ、僭越ながら以下に記しておきます。ご笑覧いただければ幸いです。

「グローバル化はテクノロジーや商取引などに関して使われることの多い言葉で、時間短縮など効率性と深く関係している。そこにはしばしば早くて安いほうがよいという考え方がある。しかし文学はそれと正反対で、遅いほうがよいという価値観も成立する。例えば一冊の本を何度も読み、一生かけてようやく何かを理解する。これは人類の最高の贅沢と言えるだろう」

「しかし出版社にも効率性を求める風潮は当然ある。あるとき一人の編集者から『山田先生、2 時間で読める本を書いてくれませんか』という信じられないオーダーが入った（会場にどよめき）。私は、喧嘩はしなかったが、出版社を変えた（会場爆笑）」

「インドには”Saraswati and Lakshmi do not go together.”（サラスワティとラクシュミーは性が合わない）という表現がある。精神と物質は両立しないという意味にしばしば使われるようだ。しかし本当のグローバル化を望むなら、その考えはやめて、私たちは弁才天と吉祥天を両立させるべき時に来ているのではないか」（以上、大意要約）

司会を務めたアショク・フェリー氏はスリランカの著名な作家で、的確でユーモラスな質問を次々に繰り出してくれたため、このセッションは 6 人がそれぞれ有意義なトークを出来たように思います。

文学祭の会場には小さな講堂が 6 つあり、それぞれの講堂では同時進行で複数のセッションが開催されました。つまりすべてのイベントを視聴することは不可能で、どのセッションに行くかは自分で選ばなくてはならないわけです。

プログラムを見ると、「詩の朗読」のセッションが多数ありました。今回の文学祭に限らず、インドでは子どもの頃から、大きな声で、まるで役者さんのように身振り手振りを交えながら自作の詩の朗読をすることが珍しくありません。

実は、文学祭初日の朝、筆者は会場で女性 4 人組と目が合い、どちらからともなく手を振り合っていました。日本人とよく似た顔立ちの女性たちで、着ている民族衣装はサリーともサルワール・カミーズとも異なる独特な着こなし。聞けば北東部の「七姉妹州」からやって来た詩人たちということでした。初対面でしたがすぐに打ち解け、ランチをご一緒しました。自由時間には彼女たちとオートリキシャに相乗りして市場へ繰り出し、昔からの友達のように遊びました。この間、会話はもっぱら英語で行なわれました。

その流れで、筆者は文学祭 4 日目に行なわれた『部族の詩人たちの集まり』なるセッションにおもむき、彼女たちの詩の朗読を拝聴したのですが、それは本当に貴重な体験でした。



「グローバル化する世界のためのグローバル文学」のテーマでのディスカッション風景（左から2人目が筆者、4人目は司会のアショク・フェリー氏）©Mami Yamada

それと言うのも、筆者には彼女たちの母語であるカシ語 (Khasi) やニシ語 (Nyishi) がまったく解らなかったのです。彼女たちが熱烈な様子で詠み上げる詩を聞きながら、インドの複雑さについて改めて考えさせられました。

ご存知のように、インドは「超」が付くほどの多言語国家で、すべての国民にとっての共通言語であるナショナル・ランゲージ (国語) というものが未だに存在しません。

インド準備銀行が発行する紙幣にヒンディー語と英語をはじめ全部で 17 言語の説明書きが印刷されているのは有名な話ですが、それはまだ序の口。2010 年から 13 年にかけて行なわれたインド国民言語調査 (PLSI) によれば、インドには 780~880 程度の言語があり、パプア・ニューギニアに次いで世界第二位の多言語国家であるとのこと。ただし、そのうちの 197 言語は話者数の減少によって存亡の機にあり、絶滅危惧に瀕した言語数ではインドが世界第一位にランキングしてしまいました (注 1)。

カシ語とニシ語は、それぞれ話者が 100 万人ほどいるそうですから絶滅の危機に瀕してはいないでしょうが、人口 14 億人強のインドにあってマイノリティ言語であることは間違いありません。紙幣に印刷された 17 言語にも入っていません。その、大国の片隅で細々と生き続けている言葉で紡がれた情熱的な詩に耳を傾けながら、気がつくとなんか胸が一杯になっていました。

インドの南部や北東部などを訪れたことのある方はご存知のように、インド国内にはヒンディー語がほとんど通じない州や地域も少なくないのです。インド政府は過去にヒンディー語を国の唯一の公用語にしようと試みたこともありましたが、この時はマハラシュトラ、タミル・ナドゥ、パンジャブ、西ベンガル、カルナータカ、ポンディシェリー (現プドゥッチェリー)、ナガランド、ミゾラム、アンドラ・プラデシュなどの州の強い反発を招き、1965 年には南部タミル・ナドゥ州で大きな暴動に発展してしまいました。

この事態を受けて 1967 年、公用語法が改正され、ヒンディー語を公用語として採用していないすべての州議会とインド議会の各院でその旨の決議が可決されるまでは英語の使用は終了しないこと、言い方を変えればヒンディー語 (Modern Standard Hindi) とインド英語 (Indian English) の双方を「無期限公用語」として使用することが事実上は保証されて、現在に至っていると言います (注 2)。

2023 年現在、ヒンディー語を唯一の公用語にしようという動きは再燃しつつあるようです。筆者は 33 年前からインドに通い続けていますが、個人的な感想としては、最近のインドでは公の場でヒンディー語のみが使われる場面が増え、英語の存在感が薄れてきたように感じる瞬間が少なくありません (例: 政府系イベントの広報がヒンディー語だけで表記されている、など)。

このように、政治的にも複雑かつデリケートな言語事情を抱えるインドですが、その中でサーヒティヤ・アカデミーの使命は、国内で使用されているメインの 24 言語 (ヒンディー語+英語+22 の主要な地域言語) を支援し、文学の分野で功績を残した人物への表彰、将来有望な人物の奨励、大衆の教育、文学と文芸批評の水準向上に努めること。

具体的には、インド全土で年間約 600 の文学プログラムの開催、再版を含む約 500 の文学書の出版、賞の授与、旅行助成金の交付、優れた研究者に対するフェローシップの授与、インド全土での年間約 150 の書籍展示会開催または参加など、その仕事はきわめて多岐にわたるようです。また若手作家、女性作家、ダリット (カースト制度の最下層に置かれた人々) 出身作家、北東部出身作家といった、社会的に弱い立場にある作家たちの振興・奨励にも近年特に力を入れているとのことでした。

モノリンガル (一つの言語だけを知っている/使っている人) な日本人からは想像すらできない難しい状況の中で奮闘するサーヒティヤ・アカデミーの活動に心から敬意を表すると同時に、インドの諸言語が何人からも侵害されることなく自由に生きられる環境がいつまでも続きますことを、心から祈ってやみません。

注 1 :

<https://economictimes.indiatimes.com/news/politics-and-nation/seven-decades-after-independence-many-sm-all-languages-in-india-facing-extinction-threat/articleshow/60038323.cms>

注 2 : <https://rajbhasha.gov.in/sites/default/files/olact1963eng.pdf>

※今号で記事を書いてくださった山田真美先生が、「ナマステ・インディア 2023」開催に合わせて、9 月 23 日 (土) 13 時半より別会場で講演会を開催いたします。とても面白いお話が聴けますのでぜひご参加ください。詳しくは本誌 13 ページ、および封入チラシをご覧ください。

日印交流の舞台横浜 ～都市の発展と世界への貢献～

Yokohama, the stage for Japan-India exchanges

～Development of cities and contribution to the world～

ディスカバーインディアクラブ (DIC) 代表・会長代行
横浜ムンバイ友好委員会理事 個人会員 金子延康

はじめに

横浜市は約 370 万人を擁する日本で 2 番目の大都市であるが、横浜の都市の歴史は 1859 年の鎖国を解いた開港からで、未だ約 160 年と比較的若い都市である。客船の寄港数が日本一、IT 産業と外資系企業の数も日本一の都市。また、港の景観が美しい観光都市であり、2002 年には FIFA ワールドカップ決勝戦、2010 年には APEC、2019 年には TICADVII (第 7 回アフリカ開発会議) が開催されたコンベンション都市でもある。横浜は人間でいえば未だ成長期にある都市である。

都市も人間と同様に誕生し成長する一緒の生き物であり、成長・発展のためには他の都市との交流が不可欠である。特に港町である横浜は、海外の多くの都市と交流や連携をしながら成長発展してきており、現在、8 つの姉妹友好都市、7 つのパートナー都市など、各国の都市と、スポーツ・文化・技術などを通して様々な交流を行っている。

なかでも、インドのムンバイ市との交流の歴史は長く、1965 年に姉妹都市の締結以来、60 年近く、文化、経済など、さまざまな分野で幅広い交流を続けてきている。この小稿では、横浜のインドとの交流のこれまでと日印交流の舞台としての横浜の展望について紹介したい。



海から見た姉妹都市 横浜・ムンバイ

日本とインドとの長い交流の歴史と横浜

横浜とムンバイとの交流の紹介の前に、横浜を舞台とした日本とインドとの交流の歴史を概観したい。古くは 552 年の仏教伝来により、インドの思想が日本に伝わってきて日本の精神文化の礎となった。752 年東大寺で大仏開眼大法会を開催、インド人僧侶の菩提僊那が導師を務めた。横浜にある大倉精神文化研究所には、日本の精神文化の礎となったインドからの思想の伝来が記録されている。

1859 年に日本の鎖国を解き、横浜に港が開かれ、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オランダの 5 か国との貿易が始まった。この開港より当時イギリスの支配下にあったインドの商人たちが、数多く横浜に居留して諸外国との貿易を行い、横浜港と横浜の都市の発展に大きく貢献した。横浜は、1 世紀半近くに及ぶインドとの交流の歴史を有している。インド貿易商が横浜に来て商売の拠点設けたのは、横浜開港から 4 年後のことであった。以来、横浜は、貿易などを通じてインドと緊密な友好関係を保ってきた。

横浜は日本とインドの文人の交流の街でもあった。中でも、アジアで初めてノーベル文学賞を受賞したインドの詩聖タゴールとアジアの文化の素晴らしさを「茶の本」として世界に伝えた日本の文人岡倉天心との交流は特筆すべきである。タゴールは 1917 年から数回来日し、岡倉天心もインドのタゴールを何度も訪ね、西洋化を進めるだけでなくアジア固有の文化の素晴らしさを大切にすることが重要であることを共有し、「アジアは一つ」として連携を唱えた。その後、インド独立の志士である、ビベカーナンダやチャンドラ・ボースも横浜を拠点に、多くの日本の文人などと交流し、その後の日本とインドとの友好の礎を築いている。

過去には困難な時期もあった。1923 年の関東大震災で横浜は壊滅的な被害を受け都市機能を失った。多くのインド貿易商が神戸に移るなど横浜経済も大打撃を受けた。横浜は官民あげて、インド貿易商を呼び戻すため、事業所建設を助成する特別基金を創設するなどを行った。第 2 次世界大戦の横浜大空襲により、再度大打撃を受け貿易商など経済機能も多く流出した。インド貿易商を横浜に呼び戻すため、20 棟のビルを建設してインド貿易商が格安な家賃で利用できる措置を講じた。

山下公園には、横浜印度商協会から寄贈された“インド水塔”がある。関東大震災で亡くなられた方々の慰霊と、震災の際の日印協力への感謝として横浜市に送られたもので、日印交流の大事なシンボルとなっている。震災 100 年にあたる今年 2023 年にインド水塔はリニューアルされ、駐日インド大使他、大勢の在日インド人と日印交流関係者が参加のもとに、関東大震災被災者・インド人被災者追悼式が行われた。黙とうの後、シビ・ジョージインド大使から、「大震災からの復興のため横浜市民とインド人がさまざまな協力体制をとった。過去から学び、将来も日本と大きく協力体制を築いていきたい」と述べられた。日印友好のシンボルインド水塔を大切に



日印友好の象徴 横浜インド水塔

して、広く世界の平和を願い、交流・連携を進めていきたい。

21 世紀になって、タタ、ウィプロ、アイゲート、NIIT など大手インド企業が横浜に数多く進出し、また、日揮、千代田化工、日産はじめ多くの日本企業においてインドからの多くの技術者・専門職の方々が働いている。横浜には、大勢のインド人が住みビジネスなどで活躍している。

このように、横浜は開港以来約 160 年以上の間、日本とインドとの交流の舞台となってきた。また、インドの人々は港横浜の貿易の担い手として、街と文化の形成に、さらに新しい産業の担い手として横浜の地域経済の発展に、大きく貢献してきている。

横浜とムンバイとのこれまでの主な交流事業

横浜市とインドのムンバイ市とは姉妹都市であり、さまざまな交流を行ってきている。横浜在住インド人が架け橋となり、横浜市は 1965 年にムンバイ市と姉妹都市提携を結んだ。インドの都市との姉妹都市提携は全国で横浜が初めてであった。ムンバイと提携したのは、横浜がインドとゆかりのある都市であること、ムンバイは横浜と同様に港を中心に街が栄えた歴史を持つ港町であること、ムンバイは横浜からの欧州への主要航路に寄港する主要港であり、海の大動脈で結ばれていることなどからであった。

姉妹都市の締結後、横浜とムンバイにはそれぞれの市民により構成される友好委員会が発足し、これまで、お茶、盆栽、舞踊、音楽などの様々な文化事業を中心に市民交流を行ってきた。また、ムンバイ市からはインド象が、横浜からは日本庭園が贈られることなどにより、両市の市民が互いに姉妹都市であること認識し更なる交流に発展した。

姉妹都市締結から 50 周年の記念すべき年には、ムンバイの両市において、行政レベルだけでなく市民レベルでも多くの記念事業が開催された。ムンバイから市長一行が横浜を来訪し、50 周年の節目を祝うとともに、長年にわたる交流を振り返り、学生の交流など新たな交流の提案がなされた。一方、横浜からはムンバイを訪問し、横浜ムンバイ友好 50 周年式典を開催した。この式典に合わせて、横浜の中小企業関係者のミッションがムンバイを訪問し、インドの経済団体や企業との交流を行った。

市民レベルでの交流団体である、横浜ムンバイ友好委員会が市庁舎と印日協会を訪問し、お茶や盆栽、音楽などの交流を行った。さらに、両市のトップマネジメントのレベルでの会議が何度も行われ、都市の発展のための政策の連携が行われた。その後、行政レベルでは 5 年ごとに両市の交流イベントが行われ、また、市民レベルでも不定期に数多くの交流が行われてきている。

横浜を舞台として多様な日印交流が進展

横浜を舞台として様々な日印交流事業が進展している。横浜には、日印交流を推進する経済・文化団体が数多くあり、相互に協力・連携して進めていることも横浜の日印交流の特色である。横浜では、横浜ムンバイ友好委員会をはじめ、在日インド商工協会、横浜インドセンター、ディスカバーインディアクラブ、日印女子フォーラム、など多数の団体が連携して日印交流に貢献している。

横浜には、インド人の子弟の教育施設としてインド人学校が 2008 年に横浜の緑区霧が丘に開設されている。日本に住むインド人と日本人とのコミュニティの支援として、インドのお正月の祭りディワリを横浜にある日印交流団体が協力して毎年開催している。ディワリインヨコハマでは、これまでの日印交流の歴史を紹介、ステージでインド古典舞踊やボリウッドダンス、古典音楽など披露され、毎年約 8 万人の方々が参加され楽しまれている。

る。よさこいダンスと、ムンバイのハリウッドダンスを融合させた、ポリコイダンスを創作し、日本とインドの人が一緒に踊り友好のお祝いをした。街中で踊った日印のコラボレーションのダンスは多くの市民から好評を博した。

学生どうしの交流も進んでおり、50周年にはムンバイで横浜の大学を卒業した若手音楽家からバイオリンを習っている子供たちが来日し、横浜の大学などで演奏して腕前を披露した。今年2023年には、デリーの高校生が、横浜の高校を訪れ、高校生レベルでの交流も始まっている。

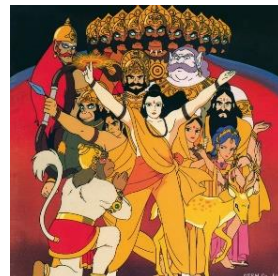
また、1993年に横浜ランドマークホールにて初公開された“日印合作映画ラーマーヤナ”は、現在ではデジタル4K版としてインドをはじめ広い地域で上映され、争うことの愚かさや平和の大切さを広く世界に伝えている。



日印交流イベント
ディワリンヨコハマ



横浜を舞台にした日印の学生交流



日印合作映画 ラーマヤナ

これまでの日印交流を、日本とインド、地球の持続的発展につなげる

地域の発展と魅力の向上には、国レベルでの連携に加えて、都市レベルや市民レベルでの国際交流が不可欠である。横浜も都市レベルでの交流に加えて、市民どうしの交流をより深めている。例えば、横浜を拠点とする、インドとの市民レベルの市民交流団体であるディスカバーインディアクラブ（DIC）は、デリーやムンバイ、アーメダバードを拠点とする市民交流団体と連携しながら、文化交流とそれぞれの地域の魅力紹介やクリーンインディア、女性の学習支援など、地域の課題解決での連携協力を始めている。

横浜とインドの都市との交流の活発化は、相互交流による地域資源の連携によるイノベーションをもたらし、双方の地域を活性化させるだけでなく、地域の課題を経験や技術といった、ソフト・ハードを通じた解決発展にも繋がっている。

こうした日印の都市間連携・市民交流の促進は日本とインドの発展に大きく寄与し、広くアジアの平和と発展、地球の持続的発展にも貢献できるものと確信し関係者と連携して実践を続けたい。

[参考文献]

- 「The Development of Yokohama & Mumbai Through Sister City Exchanges」 By Nobuyasu Kaneko
Japan SPOTLIGHT・March / April 2016
https://www.jef.or.jp/journal/pdf/206th_Cultural_Exchange.pdf
- 「都市の持続的発展(SDGs)のための免疫系インフラの役割と設計」 金子延康
横浜市立大学論叢 社会科学系列 70号：2019年3月発行 <https://ycu.repo.nii.ac.jp/records/1775>

インド・ニュース(2023年7月-8月)

News from India

◇ インドニュース (2023年7月) ◇

1 外交

(印・タンザニア関係)

- 5日から8日、ジャイシャンカル外相がタンザニアを公式訪問。

(印・イラン関係)

- 5日、ミスリ国家安全保障担当次席補佐官が、国際南北輸送回廊 (INSTC) を経由した貨物輸送を促進するためにイランを訪問。イランの外相と会談。
- 25日、ドバル国家安全保障担当首相補佐官がアフマディアン・イラン最高安全保障委員会事務局長と会談。

(印・英関係)

- 7日、ドバル国家安全保障担当首相補佐官がバロー英国家安全保障担当首相補佐官と会談。

(印・モルディブ関係)

- 11日から12日、シャヒード・モルディブ共和国外務大臣がインドを公式訪問。ジャイシャンカル外相と会談。

(印・仏関係)

- 13日から14日、マクロン仏大統領の招待を受け、モディ首相はフランスを公式訪問。13日にはボルヌ仏首相と会談し、経済・貿易、エネルギー、環境、教育、モビリティ、鉄道、デジタル公共インフラ、博物館、人と人のつながりなど様々な分野における協力の促進について協議。
- 14日のモディ印首相とマクロン仏大統領との首脳会談では、防衛・安全保障、民間原子力、科学技術、エネルギー、貿易・投資、宇宙、気候変動対策、人と人との絆など幅広い分野について議論。

(印・UAE関係)

- モディ首相はフランス訪問後、15日にアラブ首長国連邦を公式訪問し、ムハンマド・アラブ首長国連邦大統領と会談。

(ASEAN)

- 13日から14日、ジャイシャンカル外相がEAS、ARF、ASEAN・インドのASEAN枠組みの下の一連の外相会合に出席するため、インドネシアのジャカルタを訪問。その後、16日にメコン・ガンジス川協力メカニズムの第12回外相会合に参加するため、ジャイシャンカル外相はタイのバンコクを訪問。

(G20)

- 17日から18日、G20財務大臣・中央銀行総裁会議がガンディーナガルで開催。シタラマン財務相、ダス総裁が共同議長を務めた。

(BIMSTEC)

- 17日、ジャイシャンカル外相はBIMSTEC外相会議出席のためタイを訪問。ジャンオーチャー・タイ王国首相を表敬。

(印・独関係)

- 19日、ハーベック独副首相が訪印し、ジャイシャンカル外相と会談。

(BRICS)

- 20日、ジャイシャンカル外相はBRICS外相会合にオンライン参加。

(印・中関係)

- 24日、ドバル国家安全保障担当首相補佐官が王毅中国国務委員と会談。

(印・露関係)

- 25日、ドバル国家安全保障担当首相補佐官がパトルシェフ・ロシア連邦安全保障会議書記と会談。

2 日印関係

- 4日から7日、菅義偉日印協会会長が経済ミッションとともにインドを訪問。アーメダバードでは、ムンバイ・アーメダバード間高速鉄道建設現場を視察し、ニューデリーでは、インド商工会議所連合会（FICCI）及びインド工業連盟（CII）との交流などの行事に出席後、モディ首相との会談を行った。
- 17日から18日、ガンディーナガルで開催されたG20財務大臣・中央銀行総裁会議に鈴木俊一財務大臣及び日本銀行の植田和男総裁が出席。
- 22日、ゴアで開催されたエネルギー大臣会合に西村康稔経済産業大臣が出席。
- 27日から28日まで、林芳正外務大臣がニューデリーを訪問し、ジャイシャンカル・インド外務大臣との間で日印外相間戦略対話を開催。また、インド外務省とアナタ・センターが共催する日印フォーラムの開会セッションに出席し、挨拶を行うとともに、モデレーター及び聴衆との間で質疑応答を実施。
- 28日、チェンナイで開催されたG20環境・寄稿持続可能性大臣会合に西村明宏環境大臣等が出席。

◇ インドニュース（2023年8月） ◇

1 内政

(中央政府)

- 15日、独立記念日にモディ首相がレッドフォートで演説。モディ政権の実績と今後のさらなる発展を約束した。
- 23日、チャンドラヤーン3号月面着陸成功を祝福し、モディ首相が「我々は地球でこれを夢見て、月でその夢を実現した」と発言。

(下院)

- 10日、下院での不信任動議にモディ政権は勝利した。

(モンスーン国会)

- 11日、モンスーン国会外閉会した。

(BJP)

- 24日、BJPは2024年総選挙に向け、首都デリーにおいて早期に各選挙区の懸念事項の精査、国会議員の調査を開始することを決定した。

(パンジャブ州)

- 9日、パンジャブ州にて कांग्रेसは2024年の総選挙で州の13議席全てを独自に争うと発表し、野党連合I.N.D.I.Aに属す庶民党との同州でのいかなる選挙共闘も否定した。

(西ベンガル州)

- 13日、西ベンガル州草の根会議派が、「ママタ・バナジー党首を首相に」SNSキャンペーンを開始。

(ラジャスタン州)

- 10日、ゲーロット・ラジャスタン州首相は女性のエンパワメントを掲げ、「インディラ・ガンディー・スマートフォン計画」を始動させた。また、13日には州内の全電力消費者の燃料サーチャージ免除を発表した。

2 外交

(印・ネパール関係)

- 5日、モディ首相はダハル・ネパール首相と電話会談を実施。

(BRICS)

- 22日、モディ首相が BRICS 首脳会議に出席するためヨハネスブルグに到着、空港ではマシャティーレ南アフリカ共和国副大統領により出迎えられた。
- 23日、第15回 BRICS 首脳会議（於ヨハネスブルグ）のサイドラインにてジャイシャンカル印外相がラヴロフ露外相に面会。
- 24日、モディ首相は BRICS 首脳会議のマージンにてニュシ・モザンビーク大統領と面会し、議員交流、対テロ、エネルギー、鉱物、貿易投資、海洋協力、人物交流等について意見交換した。
- 24日、モディ首相は BRICS 首脳会議のマージンにてライースィ・イラン大統領と面会し、貿易投資、連結性、エネルギー、対テロ等について議論。両首脳はチャバハール事業を含むインフラ事業を急速に進めることに合意するとともに、アフガニスタンを含む地域の発展についても意見交換した。
- 24日、モディ首相は BRICS 首脳会議のサイドラインにてサル・セネガル大統領と面会し、貿易投資、防衛、安全保障、エネルギー、鉱物、農業、薬品、鉄道、文化・人物交流、能力構築等について意見交換した。
- 24日、モディ首相は BRICS 首脳会議のサイドラインにてアリ・エチオピア首相と面会し、開発連携、キャパシティ・ビルディング、貿易投資、防衛協力、ICT、農業、人物交流等について意見交換した。

(印・ギリシャ関係)

- 25日、モディ首相はミツオタキス・ギリシャ首相とアテネにて首脳会談を実施。会談の中でモディ首相はギリシャでの山火事の被害にお悔やみを述べた。

(印・露関係)

- 28日、モディ首相はプーチン露大統領と電話会談を行った。両首脳は二国間関係の進展と課題についてレビューし、最近開催された BRICS 首脳会合を含む地域的およびグローバルな課題について意見交換した。

新刊紹介 Books Review

§ 『日本型開発協力』(ちくま新書)

著者：松本勝男

出版社：筑摩書房

価格：本体 980 円＋税

SBN 978-4-480-07561-1

著者は国際協力機構（JICA）にて東南アジアや南アジア等での開発援助業務に従事、2012年から駐在を含め通算10年以上をインド業務に携わり、現在同機構インフラ技術業務部長。

2022年末に日本が閣議決定した「国家安全保障戦略」では、基本原則として、自由、民主主義、人権尊重、法の支配などの普遍的価値を擁護するかたちで新安保戦略を遂行することが謳われている。これに従えば、日本の安保確保には、普遍的価値に基づく国際秩序の形成が必要であり、そのためには世界で多数を占める途上国との協力が不可欠であるのは明らかであると言える。安保戦略の目標達



成のためには外交力、防衛力、経済力、技術力、情報力を総動員すると記されている。その中で外交力を発揮する有力な手段が開発協力であり、日本は長年の取り組みにより豊富な途上国支援の実績を有し、各国の発展に寄与してきた。相手国の開発を第一義と考え、欧米諸国とは異なる日本の協力姿勢は高い評価を得ており、開発協力における日本の取り組みに胸を張って自信を示している。

開発協力の目的はその通りであり、日本の取り組みも基本的に是とするものであり、その取り組みを主として担ってきた組織である JICA の立場からの著者の言葉は誠に頼もしいし正しい。そしてそうであってほしいと強く願望するところであるが、実際には開発協力は常に内外の厳しい圧力にさらされてきた。

本書は、そのような内外の厳しい現実に向き合いながら、いかに日本にとって理想的な開発協力を実現するかを真っ正面から論じたところに真骨頂があり、著者の本音も隠されているのかもしれないと言ったら言い過ぎであろうか。内なる現実とは国内の政治圧力（狭小な国益論議と繰り返される予算縮小圧力）であり、外での現実とは先進国（OECD 加盟国）や新興国（中国）との国際競争の荒波である。

自由で開かれた国際秩序が重大な挑戦にさらされ、今まさに世界が激動化する中で、国際社会への貢献と自国の安全保障の確保を両立させることにこそ真の国益が存することをあらためて見出し、日本の培ってきた強みを再評価しつつ岐路に立つ日本型開発協力を建て直すことの重要性が、この本のどのページからもひしひしと伝わってくるのである。

従来の相手国の要請に基づいて援助する経済協力は、90 年代中頃から相手国にとって真に必要とする開発協力を実現しようとする方向に転換された。日本型開発協力は時間がかかっても結果として品質や安全性において相手国にとって満足度の高いものになることは衆知のことであるが、国際競争に負けてしまっただけの協力は実現できない。OECD のルールによる競争ではなく、昨今はそういう事態が新興国との競争においてしばしば散見される中で、著者が例示しているアフリカ等におけるインドとの三角協力は興味深い。

また、著者は日本型開発協力の源流として、工業化を急ぐ明治政府が初期の頃に採用した「国造り」をモデルとして念頭に置いているとし、さらに明治政府の台湾において行った社会経済開発の成功例に多くのページを割いている点も、アジアやアフリカの途上国の現場で開発協力を携わってきた著者の原体験から来るものではないかと興味深く読んだ。

本の最終章において、著者は日本型開発協力を進める上で途上国から広く信頼を集め、開発協力を実現するためには、明治期に新渡戸稲造が著した「武士道」の徳目が最も重要であるとし、「欧米の宗教に相当するものとして、武士道の徳目に焦点を当て、日本特有の道徳観や倫理観を世界に示す必要がある」と説いている。「嘘を言わない」「利己主義にならない」「礼儀を尽くす」「約束を破らない」「上の者にへつらわず、下の者をあなどらない」「人の窮状を見捨てない」「義理を重んじる」等の徳目は、日本人には常識になっており、「義を見てせざるは勇なきなり」と「勇」を持って「義」を実現すべきと本書を結んでいるのである。このような書生っぽい言葉で本を結んでいるのであるが、長年多くのカウンターパートと接し実務を担ってきた著者が経験上から本の最後に言うのであるから、それらの言葉の意味は重い。途上国支援・開発協力に限らず、国内の政治経済社会開発のあらゆる面で言えることではないかと考えさせられた。（個人会員 宮原 豊）

新規法人会員のご紹介 New Corporate Members

今月より毎号、新規でご加入いただいた法人会員をご紹介します。初回ということで2023年4月より9月5日までにご入会されたすべての法人様をご紹介します。

株式会社ディー・エヌ・エー、富士フィルム株式会社、株式会社メタルワン、戸田建設株式会社、千代田化工建設株式会社、黒崎播磨株式会社、エア・ウォーター株式会社、サントリーホールディングス株式会社株式会社、株式会社グローバルヒューマニー・テックが特別法人会員として入会されました。

株式会社サカタのタネ、株式会社IHI、山九株式会社、株式会社サンウェル、株式会社三菱地所設計、積水ハウス株式会社、住友不動産株式会社、A'ALDA Pte. Ltd.、日精エー・エス・ビー機械株式会社、医療法人社団創生会町田病院、オーオイル株式会社、株式会社テレビ東京、株式会社阪急交通社、大成建設株式会社、アーチ株式会社、日本信号株式会社が、一般法人会員に入会されました。

イベント紹介 Japan-India Events

◆ 9月23日～24日 「ナマステ・インディア2023」開催

インド関連のお買い物やインド料理も楽しむことができ、ヨガやアーユルヴェーダ、メヘンディ、インド占星術などインドを肌で体験できます。また、インド文化を担う舞踊家、音楽家がステージを飾ります。

日 時：9月23日（土）10時～20時

9月24日（日）10時～19時半

会 場：東京都代々木公園イベント広場（封入チラシの地図をご覧ください）

入 場：無料



◆ 23日13時半 日印協会主催 講演会

「ナマステ・インディア2023」に合わせて、日印協会では別会場で、下記講演会を開催致します。会場のけやき通り出口から渋谷に向かって10分ほどです。

「山田真美が詳しく解説！最新インド情報」

講 師：山田真美氏（インド工科大学客員准教授）

日 時：2023年9月23日(土)13時30分～14時半

(会場/受付：13時15分より)

会 場：TIME SHARING 渋谷神南 2B 会議室

東京都渋谷区神南1-20-2 第一清水ビル 2階

受講費：一般 1,000円 学生 500円

皆様、お誘い合わせの上奮ってご参加下さい。申し込み方法などはチラシをご覧ください

◆ 会員限定交流会の日時が決定しました！

コロナ禍でお休みをしていた会員交流会を4年ぶりに下記の通り開催致します。

日 時：2023年11月20日(月) 18時～20時

会 場：新宿中村屋 レストラン グランナ（東京都新宿区新宿三丁目26番13号 新宿中村屋ビル 8階）

参加費(飲物代込み) 会員 8,000円 定員：80名(先着順)

申し込みについては、10月中旬までにご登録のメールアドレスにお送りいたします。お待ちしております。



掲示板 Notice

< 日印協会がX (旧 Twitter) を始めました! >

Facebook ページに加えて、X の運営も開始いたしました。インド関連のお役立ち情報など、発信していきますので、フォローよろしくお願いします。<https://twitter.com/nichiinkyokai>

< 月刊インドへのチラシ同封サービスのご紹介 > ~貴社の PR にぜひご利用ください~

日印協会は毎月 1 回月刊誌「月刊インド」を約 700 名の法人会員・個人会員様宛に配送しています。

皆様のイベント周知・ビジネス拡大に、ぜひともご活用ください!

金額: 会員 12,000 円 非会員 15,000 円 (A4 サイズまでのチラシ 700 枚同封)

次回月刊インド 10 月号の発送は、10 月 20 日 (金) を予定しております。

< 編集後記 >

表紙は G20 ニューデリー・サミットでの日印首脳会談。メディア関係の法人会員の方々、お疲れ様でございました。日本のメディアはウクライナ戦争を非難しなかったことに批判めいた論調がみられましたが、私の目からは名前こそ出していないが (誰でもわかる)、武力の行使や核の威嚇はダメ! と明言した。インドの努力が痛いほどわかります。

さて、インド大使館で様々なイベントが数多く開催されておりますが、みなさまはご参加されてますか?

編集子は、8 月 30 日開催された「ラクシャ・バンダン」イベントに参加して貴重な体験させてもらいました。

なんとジョージ大使と大使夫人の額に薬指で赤い印をつけ、お二人の腕に「ラクキ」と呼ばれブレスレットを巻かせていただきました。詳しいことは知らないで参加したこのイベントは、インド人の子供たちとその親が多く参加しておりいつも違う雰囲気でした。子供たちが笑顔でステージに上がり、ジョージ大使の腕にブレスレットを結んでいきました。その後はなんと私たち大人の女性の番だったのです。姉妹が兄弟の無病息災を願い、兄弟は姉妹を守る誓いする「ラクシャ・バンダン」。忘れられないインド体験になりました。(編集子)

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。



随時会員募集中



日印協会は、1903 年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の 3 名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人・個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費 個人	1 口(8,000 円)から	☆入会金 個人	2,000 円
学生	1 口(4,000 円)から	学生	1,000 円
一般法人会員	1 口(100,000 円)から	法人	5,000 円
特別法人会員	1 口(150,000 円)から		(一般法人、特別法人会員共に)

月刊インド 2023年9月号 (2023年9月15日発行) 発行人 齋木昭隆 編集人 宮田加奈子
発行所 公益財団法人日印協会
〒102-0083 東京都千代田区麹町 1-6 麹町保坂ビル 6階
Tel: 03-6272-4408 Fax: 03-6272-4135 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: <https://www.japan-india.com/>

